

## 八女電照ギク経営の現状と問題点

中島健吾・内田昭彦

(福岡県農業試験場)

NAKASHIMA, K. and UCHIDA, A.

Studies on the Actual Conditions and Problems of Farm Management of Chrysanthemum retarded by Artificial Light in Yame District.

「経営類型別農家の経営設計に関する研究」で、47年度は花き経営を対象に研究を進めている。とりあげた花きの品目はキク・ユリ・カーネーション・バラ・ポットマムで、それぞれについて県内の主な産地を調査した。そのなかで、電照ギクの産地として全国的に有名な八女市の調査の例を素材に八女電照ギクの経営の現状と問題点について若干の考察を行なった。

## 1. 八女電照ギクの発展過程

昭和28年に電照ギクがはじめて214m<sup>2</sup>に試作された。33年には栽培戸数68戸、面積8,200m<sup>2</sup>となり、北九州に共同出荷を行なった。その後、栽培戸数、面積とも増加し、九州内での需給のバランスがくずれ、価格の暴落を防ぐため、36年から関西市場に、39年から東京市場に、42年から中京市場にそれぞれ共同出荷を行なっている。

現在の電照ギクは、栽培戸数330戸、面積45~50万m<sup>2</sup>となり、生産額4億円をあげている。このような大産地が形成された理由として、①自然的条件にめぐまれていること。とくに水田は落差のある、きわめて肥沃な沖積土で、排水がよく、田畑輪換が容易である。②生産組織が確立していること。生産から出荷までを一本化し、栽培技術の公開、資材を共同購入して組合員に安く分譲している。また「天ヶ原」という品種に限定して、栽培、規格、品質を統一し、共選共販を行なっている。③生産者の年齢が若いこと。40才までの生産者が全体の75%を占めていて、これが電照ギク栽培に対する研究心と意欲を作り上げていること、などをあげることができる。

## 2. 電照ギク農家の経営概況

キクは、その性質上、日長と温度を調節することによって年中開花、出荷することができる。電照ギクは晩生秋ギク、寒ギクを電灯照明によって、花芽

分化をおくらせ、12~3月頃に出荷するものである

八女市のキク農家は、暮出し電照ギクを1戸当たり1,000~1,500m<sup>2</sup>を栽培しており、それを中心に2~3月出し電照、促成夏ギク、シェードギク、8~9月咲ギク、秋ギクを作付し、周年出荷を行なっている。

330m<sup>2</sup>当たりの労働時間は電照ギクで500~530時間、促成夏ギクで480時間、シェードで505時間8~9月咲ギク、秋ギクで460時間程度である。

330m<sup>2</sup>当たりの所得は電照ギクで20万円、促成夏ギクで10万円、シェードで14万円、8~9月咲ギク、秋ギクで10万円程度である。

## 3. 問題点

経営的、技術的問題点をあげると次のとおりである。

①、電照ギクの先進地である愛知県では、11月から3月まで平均して、出荷しているのに対し、八女では暮出し出荷が中心になっている。そのため出荷期には多くの臨時雇用を要している。今後周年出荷栽培を行なうためには、労働配分上、暮出し電照中心から、半電照、1~3月出し電照を導入することが必要である。

②、キク専作農家では、年雇、臨時雇を入れているが、その賃金が1日800円である。今後このように安い労働力が得られるかどうかが問題である。

③、木、竹を用いてのボルト締め移転式ハウスから固定式パイプ、鉄骨ハウスに変化した。そのため、土壌障害、病害虫の発生などの連作障害が生じてきている。またハウスが分散しており、そのため生産費が高くついているので、土壌消毒を行なうこと、土地の交換分合などによりハウスを集中化することが必要である。